

高隈演習林教育関係共同利用拠点の取組(2) : 地域 コミュニティでの活動

著者	宿利原 恵, 井倉 洋二
雑誌名	鹿児島大学農学部演習林研究報告
巻	45
ページ	1-6
発行年	2020-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10232/00031769

研究資料

高隈演習林教育関係共同利用拠点の取組 (2)

— 地域コミュニティでの活動 —

宿利原 恵¹⁾・井倉 洋二¹⁾

Efforts of Joint Usage Educational Center in the Takakuma Experimental Forest (2)

—Activities in local communities—

YADORIHARA Megumi¹⁾ and INOKURA Youji¹⁾

¹⁾ 鹿児島大学農学部附属高隈演習林 〒891-2101 鹿児島県垂水市海潟3237

University Forests, Faculty of Agriculture, Kagoshima University, Kaigata 3237, Tarumizu 891-2101, Japan

キーワード：高隈演習林，教育関係共同利用拠点，地域コミュニティ，聞き書き

1. はじめに

高隈演習林（以下、本演習林）は、平成26年度に文部科学省に教育関係共同利用拠点として認定された（第一期平成26年度～30年度、第二期平成31年度～）。それ以降、本演習林の共同利用は本格化し、様々な大学等に利用され、発展的取り組みを行ってきた。第一期は4つの教育分野（1. 森づくり／林業教育分野、2. 自然体験／環境教育分野、3. 森林の働き／防災教育分野、4. 森林の生態／動植物教育分野）を掲げ、第二期からは地域コミュニティ分野を追加し、5つの教育分野を柱として共同利用の実習を受け入れている。地域コミュニティ分野は公開森林実習がベースとなっており、集落の散策や農家での農作業体験や宿泊、地域住民との交流会等を行ってきた。このプログラムは、対象となる地域コミュニティそのものが無ければ成立しないが、本演習林には隣接する集落があり、住民の協力を得て成立している。本稿では、第一期における地域コミュニティ分野での実習の取組の一つを紹介する。

2. 地域コミュニティ

2.1 地域／垂水市大野地区

本演習林と隣接する鹿児島県垂水市大野地区。世帯数は45軒程度、人口約80人。垂水市の中でも一番規模の小さい集落であり、市内で唯一小学校（大野小中学校）が閉校

（2006年3月）している学校区になる。鹿児島市との玄関口となる垂水港からは14km、車で25分程度の距離である。標高は約550mに位置し、主な産業は農林畜産業である。本地区は1914年、大正3年の桜島大噴火の際に被災した人々が開拓してできた集落であり、1909年に開山した本演習林とは密接な関係にある。拡大造林の時代には本演習林の貴重な労働力として多くの住民が従事していた。近年では垂水市の地域振興計画の中で大野地区公民館が「大野の人（交流・定住人口）を増やしたい」という願いを叶えるため、大野づくり計画（2011年）を策定し、計画に基づき実践し続けてきた。その功績が認められ、2016年度には農林水産祭むらづくり部門で内閣総理大臣賞を受賞している。実践内容としては、地域の伝統食材「つらさげ芋^{※1)}」のブランド化や加工品の開発、鹿児島大学演習林、大野ESD自然学校、NPO法人森人くらぶなどの地域内の活動団体との連携による交流人口・定住者増加などである。

2.2 団体／大野ESD自然学校

2006年3月の垂水市立大野小中学校閉校後、校舎や体育館の利活用方法として、本演習林教員井倉らが垂水市に提案したものが「大野ESD自然学校」であった。その頃本演習林では、森林資源を生かした森林環境教育や自然体験

※1 つらさげ芋

大野地区の特産品。つるのついたままのサツマイモを雨や霜が当たらないように、軒下で収穫から約1か月間寒風にさらし、熟成させたサツマイモのこと。焼き芋にすると糖度40度を超える。

活動が広がりを見せてきており、さらなる発展の場として拠点を地域内に据えることで、住民や行政との協働により相互の学びと地域の活性化へ発展することを期待していた。

2.3 団体／たかくま森人クラブ

大野 ESD 自然学校の設立により、大学生にボランティアスタッフとして手伝ってもらうことを計画した。その学生のサークルが「たかくま森人クラブ」であり、井倉の声掛けにより、2006年7月に発足した。第一期生は主に農学部と教育学部の学生が10名ほど集まり、沢登りや、野外炊事、野外活動などの研修合宿からスタートした。活動2年目になると、自然学校の活動だけではなく、大野地区の行事にも加わることとなった。集落の草払いや水源地の掃除、夏祭りや伝統芸能の踊りなどを通して住民と交流することが多くなった。2013年にはたかくま森人クラブの卒業生が大野地区住民となり、大野地区をメインの活動地とする「NPO 法人森人くらぶ」を設立した。筆者宿利原もたかくま森人クラブの第一期生であり、2015年より大野地区住民である。

以上のような大野地区の持つ特色と、大野 ESD 自然学校の設立、たかくま森人クラブや NPO 法人森人くらぶの活動等により、学生と地区住民との交流が盛んになっていった。そんな中で2015年3月の公開森林実習「大隅の森と人」を大野地区をフィールドに実施したことに始まり、以後実習の受け入れを地区に依頼することが増えていった。

3. 利用科目

3.1 利用大学／科目

2019年3月、東京農業大学の「ファームステイ」という科目で女子学生2名（1年生）が来演した。本科目の到達目標は「学科の指定する農家や農場で、生活をともにしながら、集中で農業実習する。現場での農業感覚、農業生活を修得する」とし、取り扱う領域として、1. 農家が行う農業、2. 農家の生活、3. 農村コミュニティの仕組み、としている。本実習は本演習林だけではなく、前後で鹿児島県南大隅町の農家でファームステイを行っている。

3.2 実習内容

5日間を前半後半に分け、到達目標と領域を考慮した上で前半を農業実習、後半は公民館主催のサロンへの参加と

集落の中での聞き書き^{*2}活動に取り組んだ。実習スケジュールを表-1に示す。

農業実習は共同利用受け入れの際によくお世話になる農家の中から今回は2軒の農家に依頼した。1日目の A 農家（兼商店経営）では、しいたけの駒打ちと商店の主力商品、焼き芋の加工手伝いを行った。2日目の B 農家でも、しいたけの駒打ちと、サツマイモの苗床づくり、大根の収穫を行った。農作業内容もちろん重要だが、その土地で農家がどのような暮らしを送っているか、その上でどのように農業を生業、家業としているのか、学生が直接学ぶことのできる貴重な場である。

後半はたかくま森人クラブの学生にも加わってもらった。聞き書きをする上ではどうしても方言や言い回しが聞き取りにくいことや、普段から住民と交流のある学生が帯同することで住民も東京農業大学生もリラックスして聞き書きに臨めると考えたからだ。また、普段から住民と交流していても、聞き書きで聞き出す内容の話は普段からすることは減多にない。たかくま森人クラブの学生にとっても貴重な経験になると考えた。また、聞き書きの活動1日目の午前中には大野地区公民館主催のサロン活動に参加した。活動内容は、保健師指導による筋肉体操と、レクレーションゲーム。そして昼食を高齢者の女性と学生で調理した。料理の基本から郷土料理の作り方を直接指導してもらい、短い時間ではあったが交流を図るとともに、学生は山村の食文化に触れることができた。

昼食を済ませ、午後からは聞き書き活動を開始した。学生が3人ずつのグループを組み、各家庭を訪問して聞き書き活動を行った。この地を昔から良く知っているであろう高齢者を主に選定した。1日半の時間を半日ずつに区切り、3グループが3家庭を訪問し、合計9家庭で聞き書き活動を行った。仕事をしながら話を聞かせてもらう家庭や、1人では恥ずかしいからと近所の友達を呼んできたという高齢者、昼食も用意したから食べていきなさいという家庭、話だけでは分からないだろうからと畑に連れ出してくれる家庭と、それぞれの家庭のスタイルで受け入れていただいた。その中で学生は1人がリーダーとして主に話を聞き出す役、もう1人がそのサポート役、そしてもう一人は記録者としてそれぞれの役割を持ちつつ、聞き書き活動を行った。語り手には質問されても話したくないことは話さなくて良いとあらかじめ伝え、話は全てボイスレコーダーで録音させてもらった。

グループには筆者らも同行し、難しい方言や言い回し、

*2 聞き書き
人から聞いた話をそのまま書き留めること。2002年に林野庁と文科省が共同で「森の聞き書き甲子園」を始めて以来、毎年100人の高校生が森や自然と共に暮らす人々の生き様を記録している。

話の中の登場人物等を要所で聞き手の学生に説明する等のサポートを行った。聞き手の学生は、初めて聞くばかりの話の聞きながら、その話の腰を折らずに、自分たちが聞き出したことをどのように質問したらいいか、頭をフルに回転させながら聞いていた。

聞きとりが終わると次の作業となるボイスレコーダーの書き起こし作業に入る。日中は聞き取りだけに時間を割いているため、宿舎で夜にこの作業を行った。2時間程度の録音だが、書き起こすとするとその2倍もしくは3倍以上時間のかかる仕事である。しかも高齢者の鹿児島の方言が混じっている。聞き取っている最中のメモも併せて、何回も巻き戻しながら、なるべく語り手の言葉に忠実に文字に起こしていく。また、夜のミーティングでは各グループ各家庭で聞いた話を簡単に報告し、全員で共有した。

聞き書きが初めての学生は最初の1家庭目ははてこずったようで、その日の夜に3人でミーティングをして翌日の作戦を考えていた。特に東京農業大学の2人は鹿児島の方言が分かりづらく難しい実習だったと思うが、鹿児島大生と協力しながら奮闘していた。

最終日には公民館で発表会を行った。そのため、1日半のすべての聞きとりが終わると、書き起こされた原稿と、聞き取り中のメモ、語り手の写真を素材として、A3用紙に語り手の話を学生が1人ずつまとめる作業を行った。これは発表の際に使用し、その後語り手に贈るものとなるので、学生たちも聞き書きさせてもらったお礼になるようにと様々な工夫を凝らしながら作成した。

発表会は、聞き書きをさせてもらった家庭の方、またそのお子さんや地区住民で参加できる方をお呼びした。語り手本人は自分の話なので、恥ずかしそうに聞いていたが、お子さんからは「自分の親のことだが今回初めて聞く話があった」という言葉や、地区住民の方も「昔からその人のことを知っていると思っていても初めて聞くことが多かった」等と、多くの方から「大変貴重な機会となった」という言葉をもらった。また、語り手からは「自分のことを目で見える形にまとめてくれて嬉しい。大事にする」という言葉をもらった。学生たちも語り手本人の目の前で本人の一生を人に伝えるという大仕事に大変緊張していたが、語り手にお礼を言われてほっとしていた。

書き起こし作業は実習期間中に終わらないため、持ち帰って後日聞き書きレポートとして提出してもらった。このレポートは報告書にまとめられ、大野地区とそこに暮らす住民の貴重な記録として、後日語り手および公民館へ届けられた。

4. 成果

農業実習では、農家の実態を知ることとなった。南大隅町と大野地区の農家では、経営規模や取り扱う作物、環境も異なり、同じ鹿児島でも農業の在り方や農村コミュニティの多様性に触れられたのではないだろうか。また、南大隅町ではすべて農家での宿泊であったが、演習林では鹿児島大生との合宿生活（自炊）を送り、学生同士の交流も深められた。また、サロン活動は聞き書きの語り手を含めた住民たちと初めて出会う場であり、学生にとっては初対面の高齢者とのコミュニケーションの取り方を学ぶ機会となった。

聞き書き活動には2つの点で大きな成果があったと考えられる。ひとつは「聞く」ことの学びである。相手が何を伝えたいのか、さらに深く引き出すためにはどのように声をかければよいのか、ということを考える機会となった。初対面の語り手に、自分のことを信頼してもらい、語り手しか知らない情報を面と向かって聞き出す。しかも生い立ちから普段の生活のことまで。その話をまとめたものを語り手本人にお返しすることになるので、正確な情報である必要があるし、なるべく詳しい話を聞き出したい。分かりづらいことがあれば躊躇せずにもう一步踏み込んで質問する必要がある。聞き手の学生は、話を整理しながら、さらに深く追求しながら、多くの情報を引き出そうとする体験を通じて、「聞く」ことの難しさや面白さ、そのためのスキル等についての多くの気づきや学びがあったものと思われる。

二つめは「記録」としての価値である。今回の語り手の話は、筆者はもちろん家族や同じ集落に暮らす人にとっても初めて聞くことが多かった。現代の暮らしからは想像できないような世界であっても、その時代を生きてきた人たちから発せられた話は紛れもない事実である。聞き手の学生は、語り手の言葉から、その生き様や歴史を忠実に文字に書き起こした。記録化されることにより、語り手の生き様は可視化され、聞き手は改めて自分の中に落とし込むことができる。そしてこれらの情報は聞き手・語り手だけのものではなく、他者も情報として共有することができる。会話だけのコミュニケーションでは本人たちだけの情報になるかもしれない。また、人との付き合いが長いとその人のことを知っているつもりになり、新たな情報が聞き出せないことが多い。このことは、今回の聞き書きを通じて住民でもある筆者自身が痛感したことである。聞き書きは、外部者である初対面の学生が真っ新な状態で、語り手に話を聞いたことによって、9名の語り手の人生と集落の新たな歴史が共有され、大野地区にとっても大変貴重な機会に

表-1 ファームステイの実習スケジュール

	時間	活動内容	活動場所	備考
1日目	終日	しいたけの駒打ち 焼き芋加工	大野地区・A農家	
	夜	ふりかえり・宿泊	演習林宿舎	
2日目	終日	しいたけの駒打ち サツマイモの苗づくり, 大根収穫	大野地区・B農家	
	夜	ふりかえり・宿泊	演習林宿舎	以後鹿児島大生参加
3日目	午前 午後	公民館主催サロン活動へ参加 聞き書き活動1日目	大野地区公民館 大野地区集落(各家庭)	
	夜	聞き書きまとめ・宿泊	演習林宿舎	
4日目	午前 午後	聞き書き活動2日目 〃	大野地区集落(各家庭) 〃	
	夜	聞き書きまとめ・発表準備・宿泊	演習林宿舎	
5日目	午前 午後	聞き書き発表 ふりかえり 高峠登山	大野地区公民館 演習林宿舎	

なつたと考えられる。

5. おわりに

本稿では、本演習林における教育関係共同利用拠点の取組の一つとして、聞き書き活動を中心とした地域コミュニティ分野のプログラムを紹介した。近年、中山間地域では過疎化、高齢化の進行とそれに伴う農林業の担い手不足や耕作放棄地等の課題が山積しており、今後このような問題に取り組む人材の育成が求められている。しかしながら、大学教育において学生が農山村の実態に触れ、地域住民と交流し、自然とともに生きてきた地域の暮らしや文化を体験を通して学ぶ機会はきわめて限られている。

本演習林が地元集落との協働により実施する本プログラムは、森林、自然環境、林業といった従来の演習林でのプログラムとは異なり、自然と人の関わりを過去へ遡る体験を通して未来を考える授業でもある。本演習林以外では体験することのできない貴重なプログラムであると自負しており、文系・理系を問わず多くの大学生に利用してもらいたいと考えている。



写真-1 しいたけの駒打ち作業



写真-2 サツマイモの苗床づくり



写真-3 焼き芋加工



写真-4 農家での昼食



写真-5 サロン活動 (レクレーションゲーム)



写真-6 高齢者との調理



写真-7 聞き書き活動①（仕事中に話を聞く）



写真-8 聞き書き活動②（お宅で話しを聞く）



写真-9 聞き書き活動③（アルバムを見せてもらう）



写真-10 聞き書き活動④（成果物作成中）



写真-11 聞き書き活動⑤（発表会）



写真-12 聞き書き活動⑥（語り手・聞き手全員で）